

短歌（十九）

下田 明美

西安の近くの村の青空に

黒煙登る初期資本主義

人体に危険な暑さの日が続く

きんかんの花白く涼やか

珍しい、ドライフラワーのすずらんを

壺に飾りて再利用かな

レモンの実 今年は何つと見ていたら

葉裏に蜂の巣二つ三つ、四つ

広場にはクリスマスマーケット立ち並び

ホットワインのりんごの香り

横浜の波止場の何処かにあるかしら？

天国行きの特別船が

うなされた声ではなかった朝一番

聞こえてきたのは蟬の合唱

洋上に台風二つ発達中

上陸しないで何処かへそれて

山際やまのはに広がっている青い空

一人で見ている哲学的に

秋の夜を鳴き分けている虫たちよ

何時結んだの平和条約

朝焼けの紅くれない染めた雲たちが

山風に乗り相模湾へと

楽し気に嬉し気にムクゲ咲く

夕べに散ると知るや知らずや

あんた好き、酒飲みだからと言った師は

鬼門に入りて三回忌なり

心配すればピタリと止まる虫の声

鈴虫鳴いてる、私が居ても

部屋にいて台所にいて、ベッドでも

取り囲まれているジイジイ蟬に

母の部屋 仏間だった4畳半

腰痛あれば摺り足で行く

